

ZENBUTSU

全仏



No.
573

仏暦2554年10月
[2011年]



山形県 吹浦海岸の十六羅漢岩 — 撮影 仏像ガール®

2011年8月2日開催シンポジウム 「葬儀は誰の為に行うのか?② — お弔いとは —」特集号

目次	消費者アンケートから見える「お弔い」について……………2 佐伯 美智子氏(財団法人日本消費者協会消費生活コンサルタント)
	絆を大切にするお葬式……………4 広原 章隆氏(イオンリテール株式会社イオンライフ事業部事業部長)
	仏教者は今、何を伝えるべきか? 布施・弔いから、生きる意味を考える……………6 林 数馬師(株式会社おぼうさんどっとこむ代表取締役)
	仏教テレフォン相談を通して「葬儀・寺院・僧侶」への意識の変動を考察する……………8 互井 観章師(仏教情報センター事務局長 日蓮宗経王寺住職)
	シンポジウム「葬儀は誰の為に行うのか?② — お弔いとは —」を開催して……………10 戸松 義晴(財団法人全日本仏教会事務総長)
お知らせ	全日本仏教会後援 東日本大震災犠牲者追悼法要厳修……………12 全日本仏教会推薦映画 手塚治虫のブッダ—赤い砂漠—美しく— DVD発売のお知らせ……………12

アンケートでは「弔う」という言葉は使っていませんので、「自分の葬儀のかたち」「今後の葬儀のあり方」の項目から「弔う」とについて考えてみました。

「費用をかけないでほしい」「家族だけで送ってほしい」「負担にならない範囲でもらえればよい」との意見が主であり、親の葬儀は今まで通りにして送るけれども、自分の場合となると非常に控えめで遺族の負担にならないようにとの配慮が伺えます。

一方、「精神的に必要。派手すぎず、地味すぎず、身分相応の式にしてほしい」、「友達にはちゃんと『ありがとう』の気持ちが伝わる式にしてほしい」、「しきたりなどもっと理解すべき。何らかの必要があることを理解することで故人を送り出せるものだと思う」、「日本文化として葬儀形式を守るべき」との意見もあります。

私は家族葬・直葬と葬儀の簡素化・簡略化の流れがある一方で、「弔う」ことは義務的なものではなく、心からの弔いたいという気

持ちを大切にしたいという考えが根強くあると感じています。

■「弔う」この意味づけを

葬儀に対して地域社会が機能しなくなったことに呼応するように、マスコミの扱いが増え「葬儀や墓」・「葬儀社や仏教関係者」に対する消費者の関心は高まりました。そこで繰り返し広げられる情報によって、今までの慣習で疑うことなく行ってきた葬儀、墓や寺院に対しても、消費者は選択肢があることを知りました。

ではこれからどうしたらよいかという消費者の思いに応えて、自治体や葬儀業社などでは消費者向けの講座を開いています。参加される多くの方は「簡単に安く」ではなく、どのようにしたら自分のできる範囲で気持ちを込めて家族を送り、送られるか、さらに後悔しないための準備などの知識や情報を得たいと集まります。会場はいつでも盛況です。

葬儀の場は、祈りの時を過ごす場だと思います。そこに「モノやサー

ビスの対価」ではない「布施としての費用」が、現実的には出てきます。消費者がその費用について納得できるかどうかは僧侶の読経、あるいは戒名（法名）や法話によって、家族の死を受け入れ、穏やかな気持ちでお送りし、これからの生活を考え心の始末を得られるかによるのではないのでしょうか。ですから布施の額は、当協会のアンケートの数字の幅の大きさでも明らかかなように、また、家族の事情や気持ちそれぞれであるように、「一律ではない」金額であつていいと私は考えます。

とはいえ、檀那寺を持たず葬儀や埋葬の時だけの場合に、僧侶に支払う費用を業者から提示されれば、消費者にとっては一つの目安になります。私自身は一見で終わる僧侶のお布施について相談を受ければ、一般的な内容をお伝えし、葬儀社から提示された額であつても、ご家族の事情とおいでくださった僧侶によって考えてくださいと伝えます。

檀家であるか否かを問わず、亡

くなった方を悼み、弔い祈るといふ家族の思いに、僧侶がいかにかかわるか、いかに寄り添い心の支えになるか、それが「布施」という形として現れてくるのではないのでしょうか。

布施の意味合い、祈りや弔いの精神性について、消費者が理解でき、納得できる言葉で、寺院側からの強いメッセージの発信が必要なのではないかと、私は思っています。

佐伯 美智子



一九三九年新潟県生まれ
日本女子大学家政学部卒業
出版社勤務の後、消費生活コンサルタント・消費生活専門相談員として消費生活センターに勤務。
現在、(財)日本消費者協会勤務
協会出版物「エンディングプラン」等の冊子の執筆。

特別寄稿②

絆を大切にしておくお葬式

イオンリテール株式会社
イオンライフ事業部

事業部長 広原 章隆

イオンは一昨年の九月に葬祭の事業をスタートした。

私自身九年前に父を亡くし、葬儀を初めて経験し喪主をした。通常の私どもがやっているビジネスとは全く違う世界で、一品一品の価格などが明確でないと感じた。何か釈然としない思いが自分の中であつたのを記憶している。

それから数年たつて、社員の中に同じような葬式の経験をした者がたくさんいて、同じ思いをもっていることがわかつた。そんな従業員の要望から葬儀についての研究が始まつた。

イオンはグループの事業領域を、生きることと暮らすこと、と定めている。「日々のいのちとくらしを開かれた心と活力ある行動で夢のある未来にかえていきます」というイオン宣言がある。イオンの活動領域と進むべき方向、指針を示したものである。葬儀の仕事

というものはまさに生活者の暮らしそのもの、暮らしに直結するものと考えている。小売業の使命は、生活者の望むもの、サービスを、生活者に代わって準備をし、より一層の利便性と満足を提供すること、そういった役目があるのではないか。お客さまに代わつて、お客さまの望む葬儀にするための手助けをする。そんな思いで、イオンは葬祭業界に参入したわけである。

「イオンのお葬式」は、十四段階で百四十項目の品質基準を設け、それを遵守することからはじまる。それは葬儀社が決めるのではなく、自分の親を送るならどんな葬儀をしたいか、して欲しくないことはどんなことかなど、どのようなことをお客さまが希望されるかをともに、イオンが設定した。

現場での施行はこの品質基準に沿って研修をした、同じ思いをも

った全国の四百六十社の特約店にお願いしている。品質チェックはイオンで行い、全ての費用をガラス張りにし、見積書・請求書もイオンがチェックしている。また、クレジットカードが使えるという支払いの利便性も加えている。

さて、布施の話では、昨今の頃、世間の皆様をお騒がせした。布施の目安ということで、イオンのホームページで表記したところ、「宗教介入である」「営利企業がお布施を料金体系化していいのか」等のご批判もいただいた。

寺院を紹介する事を始めたきっかけは、菩提寺をもたない方から寺院の紹介に関して非常に多くの相談をいただいたので、どうにかしたい一心であつた。

葬儀をしたいが菩提寺がない、どこで葬式をしたらいいのか、どこかお寺を紹介してもらえないか、「お気持ちで」というのが布施はいくら払えばいいものなのか、他本等に多数の質問を頂戴した。本当に困っていらつしゃるのである。

われわれはお寺と檀信徒の關係に介入しようなどという気持ちは毛頭ない。ただ菩提寺をもたない多数の人が困っていらつしゃる、これに答えたかつた。もしそういった声に答えられないとしたら、司式者のない直葬、無宗教葬につながっていくのではないか。それを危惧したのである。

「イオンのお葬式」において布施の目安を提示した理由も、そういう問い合わせにお応えするためのものである。また、お布施の目安はイオンが決めたものでなく、イオンが紹介する寺院で「目安」としてとりまとめたものである。

その後はホームページに掲示せず、一人一人のお客さまにコールセンターで答えるという方法にした。その理由は、ホームページに布施の金額を提示することで、仏教界全体の布施の金額ととらえられ、お布施の目安を誤解される懸念があつたからである。また、地域によつても差があるということもあり、お葬式のご依頼をいただいた方一人一人にコールセンターで口

頭でお伝えしている。

イオンでは、三月十一日の震災で百店舗以上が被災した。イオン石巻店では、家を無くされた方などに、店舗を避難所として提供した。店舗の一日も早い営業再開と地域行政の要請に応じ、水、食料品、毛布など生活支援物資の供給、約五十億円の寄付金、それに加えてこれも行政との連携だが、仙台、石巻周辺では火葬場が満杯の状態の中で、どうしても土葬はしたくないというご遺族の方には、亡くなった方のご遺体を県外へ移送、火葬し、ご遺族とともに宮城県へお送りすることも行った。そういった取り組みには、ご遺族からの感謝の声を多数いただいた。

東日本大震災から日本全体で日本人の心が少しずつ変わりつつある。互助の精神、つながりの大切さ、グリーンフサポートの大切さ、何か自分にできることはないか、と多くの人が思いそれを行動にうつした。

これを機に、人と人のつながり、

絆を大切にする葬儀を提案していきたい。

「イオンのお葬式」では、アンケートを提出してもらい評価を点数化しているが、今のところ百点満点中、「イオンのお葬式」への全体の評価は九十四・二点、葬儀担当者の点数では九十六・六点をいただいている。お客さまアンケートでは「納棺の儀は親族一同感動した。よかった」「オリジナル会葬礼状は本当に私たちの気持ちを文章にしてくれた、皆感動した」との声を頂戴している。

納棺の儀とは、必ずご遺族にもお手伝いいただきご遺体をお柩に納める儀式で、故人を敬い、ご遺族が皆さんで協力し旅立ちのご準備を整えていただくものである。またオリジナル会葬礼状とは、故人さまの人生、思い出をご遺族に自由に語ってもらって作る、世界に一つしかない会葬礼状である。これらのご遺族の絆を大切にしたいという思いでご提供しているものの一つである。

葬儀は何のためにするのか。

イオンでは葬儀をする意義は三点あると考えている。一つ目は、仏教の世界という浄土の世界へ亡くなった方をお送りする儀式。二つ目は、大事な方を亡くされて大変な思いをされているご遺族の方の心のケアをし、新たな一歩を踏み出すきっかけにしようための儀式。三つ目は、会葬してくださった方たちに命の大切さ、命の尊さ、その意義を伝える儀式。亡くなったおばあちゃんがいなかったあなたがいる、という子供の情操教育にもつながっていくと思う。

「イオンのお葬式」の目指すものは、人と人のつながり、絆を大切にすることである。故人を敬う心、遺族をいたわる心、会葬者をもてなす心、を常に大切にしたいと思っている。

私たちは常に「お客さまの立場」を最優先に考え、心を込めてお葬式のお手伝いを実践していく所存である。

ひろはら
ふみたか
広原 章隆



一九八〇年大阪外国語大学卒業（現在の大阪大学外国語学部）。同年ジャスコ株式会社入社（現在のイオン）。家電商品部長、茨城事業部長、ギフト事業開発部長を経て、二〇〇九年九月イオンリテール株式会社イオンライフ事業部長就任（葬祭事業）、現在に至る。自分の父親の葬儀経験と社員の声より、「明瞭で納得いく心のこもった葬儀」ができる仕組みを作ろうと思ひ、一年の研究後、葬祭事業を立ち上げた。

特別寄稿③

仏教者は今、何を伝えるべきか？

布施・弔いから、生きる意味を考える

株式会社おぼうさんどつとこむ 代表取締役 林 数馬

仏教は、未来を見据えるものであり、同時に今を生きる人の下支えになるものであるはずだ。人々が穏やかで、無事で、幸せに暮らすために……。

諸行無常。

「生じるものはすべて滅す。事象は流転し、価値観は移り変わり、相対的変化が起こるのは必然である」とされる。

仏教が生まれた二千五百年もの太古の昔。人々の暮らしが現代と同様だったろうか？こんな愚問が果たして必要なのだろうか？

当然、違って当たり前だからであるが、釈迦が思惟した正像末の思想をもってしても、今、我々が伝え聞く法が、当時のものと同一であるはずもなく、様々な時代、人、環境によって生じたその変化は、時の世を生きる人々へ向けた変化であるはずで、またそれも必然であると考えられる。

このように考えた時、今日の我が国における仏教が本当に「時の世を生きる人々へ向けた変化」に

堪えうるか否か疑問に思う部分があるのである。

仏教者側が、自らにとって都合のよい部分を都合よく利用し、都合の悪い部分は、「時代の流れに伴って変化するのは致し方ないこと」と、してはいないだろうか。

いつの間にか、僧侶は当然の如く肉食妻帯を是認し（真宗は別であるが）、ほぼ全ての寺院が世襲となり（真宗は基本的に世襲制を布いているが）、公から私に成りつつある。いや既に成り切っている寺院さえある。

これは仏教者側都合の変化であって、「時の世を生きる人々へ向けた変化」ではない。寺院が地域のコミュニティの中核を担った時代を忘れ、我執での維持存続だけが際立っていることさえも見受けられる。

反面、世襲となったために大変な苦勞をされている方々もおられるが。

果たして「布施」もその一つではないだろうか？

六波羅蜜という悟りを目指す実践修行法の一つとされる布施は、財施・法施・無畏施の三種があるとされる。しかしながら、今回のシンポジウムを通してフォーカスされたのは「財施」のみ。

葬儀、法事という営みにおいて、僧侶が行う「授戒」「法要」等の法施への謝意を表す財施の明示・非明示に関してである。いわば限定的なものであると言わざるを得ない。

「布施とは何だ？」という問いに「行であるからその金額の大小に決まりはない」と、直ぐに「財施」の話をする。転じて布施とは「僧侶への謝意を表す金品」のことだと思っている方も多かるう。

そして、法施・無畏施はどこへやら？僧侶の行う授戒も法要も法話も、人々の怖れ、不安を取り除く行いもすべて布施だと言うのになだ。私が二〇〇四年十二月に設立した「株式会社おぼうさんどつとこむ」においては、その費用の基準となる金額を明示している。

それを無畏施の一つとは考えられないのだろうか。

その基準となる金額設定をする際に行ったのが、八十名弱の方（下は十七歳の高校生、上は七十二歳

の男性。僧侶以外）への意識調査及びアンケートだった。

対象とした地域は、東京・神奈川・千葉・埼玉・群馬の全都県。お布施として気持ちよくお渡しできる金額は？との問いには、〇円〜五十万円までの回答があった。そして、その平均額が約十五万三千元。しかし、この金額も僧侶としての私が訊いているのであり、本音はもう少し低額なのではないか、との思いで様々勘案した結果、現状の金額設定としている。

加えて基本的なサービ地域も、現状の私を知り得る地域（アンケート調査を実施した地域に準じ）の「東京・神奈川・千葉・埼玉」の一都三県に限定している。

なぜなら、地域差があれば、この種のアンケート結果にも差が生じるはずで、加えて私の目の届かない場所や、習俗・文化が異なる現状を知り得ない地域で同様のサービスを行うには拙社では無理があり、全国一律対応などは到底考え辛い。要するに、地域に沿ったフィールドワークが不足しては、地域ごとに習俗・文化と相まったお弔いの形式の異なりを認識できず、受け手となる方々の思い、ニーズに十分応えられない。以上のようなことを踏まえ、時

の世を生きる人々の思い、ニーズがどこにあるのかを見つめずに、ある一方向の精神性の話をしても伝わるはずがないと考えるに至り、「三施」を各々の方向から考え、「時の世を生きる人々へ向けた変化」として、地域に特化した基準金額の明示を行ったわけである。

ところで、今回のシンポジウムに参加するにあたり「弔う」という言葉の意味を調べてみた。

大修館書店の「新版 漢語林」

によれば、ア、死者の霊を慰める。イ、死者の家を訪れて遺族を慰める。くやみを言う。とされており、岩波書店の「広辞苑」によれば、①人の死を悲しみいたむこと。②送葬。葬式。のべのおくり。③法事。追善。となつてゐる。

総合的に解釈すれば、「人の死に対し、その人に縁のある人々が意思を表すこと」となると思う。

生きている者だけがそれを決めて行くのである。

それぞれの方々が、それぞれの考え方で、自らの意思決定をする。規模も、形式も、日程も、経費も、全て行う方の自由意志の下、執り行われるものが葬儀である。

しかし、お弔いとは、故人に対し、その人に縁ある方々が、その思いを表すことであつて、葬儀と言う儀式は、その手法でしかない。

「こうでなければならぬ」「こうしなくてはならない」「斯様な強要は、お弔いには存在しない。そして仏教の教えも同様である。『こうしなければ成仏しない』『こうでなければ極楽往生しない』そんなことはあり得ない。

故人様から教えて頂いたこと、与えて頂いた喜び、見せて頂いた笑顔、叱責して頂いた厳しい言葉。全てに感謝し、心に向けて差し上げる「思う」ということにより、故人様との距離をしつかりと感じ、自らの生き方を整え、故人様に恥ずかしくない自分の命を生き、故人様が辱めに会わない人生を生きること。それが即ち、仏様への大切なお供えとなることをしつかりと自らの心に刻み、生きて頂きたい。生きること即ちお弔いなのだ。思う様にいかない人生だから、支え合い、縁の中で生かされていくのだ。

その思う様にいかないときに、「あー、もうこれでいいや」「どうせやっちゃったでしょうがない」と腐るのでなく、仏様となられた故人

様より頂いた教え、喜び、笑顔、叱責を思い返し、ともに生きていく縁のある方々と、支え合い、補い合いながら、頂いた人としての命を大切に生きて頂きたい。それが報恩感謝、仏恩報謝である。自分を生きて生きて生きて欲しい。仏教は生きている者の為にある教えである。

そこからすべてが始まるのだ。お布施もお弔いもご葬儀も……

結びに、「お布施」は本来、僧侶の労働報酬では無いのは承知している。しかしながら資本主義の我が国において、金銭が関わるのは仕方の無い事でもある。また、現代の宗教界を取り巻く環境は必ずしも良きものとは言えない。高額な布施を要求された、等の話によく聞くとところでもある。誠に遺憾である。大乘仏教のそれと相反していかないだろうか。「仏の沙汰も金次第」はもつての外である。

経済学的に、貨幣の三要素と言うものがある。支払手段、価値の貯蔵手段、価値の尺度がそれである。私が申し上げている「サービス」とは、下手から皆様に「させて頂く」ものであり、価値の尺度として金銭的表記をしているに他ならない。いわば一つの目安である。

当然にして「根底に信心がある」のは言うまでもない事を付け加えさせて頂く。 合掌

林 数馬



株式会社おぼうさんどつとこむ代表取締役。小平青年会議所第二十三代理事長。一九九〇年に大正大学大学院文学研究科(天台学)修士課程を修了。大正大学学部在学中に比叡山延暦寺行院にて四度加行を満行する。その後、各所での修行・小僧生活を経て、僧侶としての道を歩む。群馬県桐生市のお寺に生まれたこともあり、信念を持つて僧侶として歩んできたが、現代日本人のお葬式のニーズと、僧侶の在り方を考えた時に疑問を感じる。社会に信用される、僧侶としての新しい形を模索した結果、誰もが気軽に利用でき、明瞭な価格でのサービスが提案したいと考え、「株式会社おぼうさんどつとこむ」を設立し、現在に至る。「生き方の中のひとつにご供養がある」を提唱し、生きることに意味を、共に考える事業を展開中。

特別寄稿④

仏教テレフォン相談を通して

「葬儀・寺院・僧侶」への意識の変動を考察する

仏教情報センター事務局長 日蓮宗 経王寺住職 互井 観章

1 仏教テレフォン相談内容

昭和五十八年に超宗派の僧侶によつて開設された「仏教テレフォン相談」は、二十八年目を迎えてきた。多岐にわたる相談の中でも、葬儀や法事に関する相談、戒名に関する相談、そしてそれに伴うお布施に関する相談は後を絶たない。中には、特定のお寺や僧侶個人に対する苦情もある。

相談を受けて感じるのは、僧侶とのコミュニケーションの希薄と仏事（葬儀）等の継承断絶である。多くの相談は、菩提寺があるならば、その住職に直接聞けば解決する問題が多い。しかし、相談者は「菩提寺には聞きづらい」「こんなこと聞いていいのですか」と菩提寺を敬遠している。また、親たちがお寺と培ってきた関係性が、世代交代したときに継承されていな

いことも相談や苦情につながっていく。

菩提寺がない人にとつては、お寺や僧侶はとても遠い存在である。そのような関係性の中で葬儀や仏事が行われているのだから、トラブルや気持ちのすれ違いが生じる。

2 葬儀に関する問題

葬儀について十分な知識を持っている人はほとんどいない。まして、お寺と縁のない方にとつては、急な葬儀において、何をどうしていいのかまったく分からない状態である。まったく分からないのに葬儀の準備が進められていく。葬儀社の言うまま準備を行い、見ず知らずの僧侶が読経を行う。それで、納得のできる葬儀ができるはずがない。

特に多い相談は、やはりお布施に関することだ。「僧侶には直接聞けないので目安を教えてください

い」「お気持ちでと言われたがその気持ちの金額が分からない」などの相談が多い。中には、お寺（僧侶）から、葬儀で法外なお布施の請求を受けたという相談もある。

統計を取ったわけではないが、私個人としての感想として、相談者は心の中に金額を描いているケースが多い。心に思う金額でOKと言つて欲しい。あわよくば安くならないだろうかという期待も感じる。

相談電話を受けていると、葬儀や戒名にはお金がかかるというイメージを持っている人が多い。お布施が不明瞭、葬儀にお金をかけるなら別なものにお金をかけたい、あるいは子や孫にお金を残したい。そういう方が、お金がかからない方法として直葬や散骨を選ぶことがあるが、菩提寺がある場合、菩提寺に相談しないでおこない、トラブルの原因になっている。確かに葬儀にはお金がかかる。葬儀社への支払い、飲食の支払い、そして寺院へのお布施。菩提寺をもたない方や世代交代したばかり

の方は、お布施という行為が日常的でない。今まで、自らお寺にお布施するといった習慣がないから、お布施が戒名料や読経の対価のように感じてしまうのである。また、僧侶の中には「戒名料」を提示している方もいるし、葬儀の布施の目安を用意している寺院もある。

確かに、お布施の目安や金額の提示を求める人はいる。しかし、寺院からの一方的な提示では納得できない人も多いことも相談を通して感じられる。

3 お布施とはなにか

そもそもお布施とは何か。六波羅蜜の修行の一つで、悟りの世界へ渡る修行の一つである。であるならば、布施する人も、受け取る人も、共に悟りの世界に近づいていかなければならない。しかも、その布施は見返りを求めない、差し出すことや受け取ることに執着しない、という大前提のもとで行われる布施でなくてはならない。しかし、我々僧侶はそのことを、日常的に檀信徒の方々に伝えていくだろうか。布施だけではなく、

六波羅蜜の全てを伝え、共に実践しているだろうか。それを怠っているからお布施への問題が出てくるのである。特に菩提寺を持たない方は、お布施することに慣れていない。しかも、お布施をすることに喜びを感じていない。お布施と葬儀と成仏が繋がらないのだ。

「弔う」とは、死を悲しみ、死者の霊を慰めるために行われる儀式のことであり、生者が死者に対して追善を行うことである。もちろん、その中には死者のことを想い嘆き悲しむことも含まれている。だからこそ、仏教の力でその悲しみを乗り越え、死者の成仏を願う儀式を行い、亡き人が仏として残った人たちを見守ってくれる存在に変わること、遺族は安心を得る。死者が仏となったと思えるから、生者は「生きること」に進んでいけるのである。しかし、最近では「嘆き悲しむ」ことに重点が置かれ「成仏」が生者の救いになっていない傾向にある。弔いを忘れた葬儀。その原因を作ったのは、私たち僧侶である。死者の成仏よ

りも、葬儀を無難に執り行うことに重点が置かれ、葬儀の目的を見失ったまま葬儀が行われている。

それでは、法を聞く喜びも、お布施をする意義も見出せない。

4 仏教教団の対応

現在、宗門として教師資格を得

るときに「葬儀・法事・檀信徒とのコミュニケーション」について、

十分に教育時間をとっている宗派はどれくらいあるだろうか。寺院運営の中心でありながら、ほとんどの宗派が現場（各寺院・各僧侶）

任せにしている。お布施の問題も、葬儀式のことも、正しく学んでい

ない僧侶がおこなっている現状で、

皆が満足する葬儀が本当にできるの

だろうか。葬儀や戒名そして布施の意義や意味を常日頃から伝え

ていない私たち僧侶が、葬儀に係

わる問題の原因を作っている。葬

儀や布施、儀式への対応について

不満に思う方が出てくるのも当然

団ごとに僧侶資格を得る段階での教育が必要だと感じる。

5 シンポジウムを終えて

今回の『葬儀は誰の為にを行うのか?』というテーマは、世間から

仏教界に対しての意見なのだと思

う。私には『僧侶は何のために葬

儀を行っているのか』という世間

の声に聞こえる。つまり、仏教は

人びとを救えるのか、心の支えに

なるのか、生きるみちしるべにな

れるのか。世間が私たちに問いを

投げかけている。同じ僧侶の中か

ら「葬儀は究極のサービス業、僧

侶は商品」と言わせてしまったの

は、僧侶として生きてきた私の責

たがい
互井 観章



一九六〇年（昭和三十五年）東京新宿生まれ。北里大学獣医畜産学部畜産学科卒業後、アメリカの牧場にて酪農に従事。帰国後、出家し僧侶となる。仏教各宗派の僧侶が集まったボランティア団体「仏教情報センター」の事務局長を務め、仏教テレフォン相談や「いのちを見つめる集い」を運営し活動している。住職を務める経王寺は新宿山ノ手七福神の一つ『開運大黒天』を祀る。「あなたの心の診療所」をモットーにお寺で映画会やコンサート、一日修行、法話会などのイベントや行事を積極的にを行い、お寺の門を開け放ち、多くの方たちのご縁を生かしたコミュニティ作りを目指すアクティブな僧侶。とてもユニークなホームページもあり、ニックネームはハピネス観章。

シンポジウム

「葬儀は誰のために行うのか?②」
「お弔いとは——」を開催して

財団法人 全日本仏教会事務総長 戸松 義晴

「東日本大震災から学ぶこと」

本年（平成二十三年）三月十一

のなか第二回目のシンポジウムは
開催された。

「共通の危機感」

日の東日本大震災による死者、行方不明者は約二十万人にも及ぶ。被災地では、家を失い大切な家族や友人を亡くされた人々は悲しみや絶望感を抱えながらも、それぞれできる形で死者へのお弔い、そして祈りをおこなった。「どのよう

な形でもいいからせめてお葬式をしてあげたい」という心からの思いは私たちの胸に突き刺さり、葬儀とは「お弔い」とは何なのか、死にゆく自分のことだけを考えた単なる「お別れ会」ではなく、人と人との絆の中にあるその本来の意味を私たちに思い起こさせた。

また、一人ひとりの悲しみに寄り添い続ける被災地の僧侶の姿に感銘するとともに、僧侶による死者への弔いが人々の心の支えとなり、明日に向かう力となることは寺院と地域の人々との信頼関係の上になり立つことであると痛感した。僧侶の使命は重く、今そのあり方が問われている。このような背景

のなか第二回目のシンポジウムは
開催された。

昨年年度のシンポジウムでは僧侶や学識経験者を招き、葬儀やお布施の意義について議論を重ねた。本年は昨年のアンケートの意見を反映し、意見を異にする立場からあらためて葬儀、お布施について参加者と共に考えた。

劇的に変化をしているにもかかわらず、僧侶が昔の意識のまま葬儀をおこなうところに行き違いやお布施に対する問題が生じ、ここに僧侶の反省すべき点がある。時代や環境に応じて変わりゆく葬儀の形態を受け止めつつ、変わってはならない儀礼とその意義を日常的な活動の中で人々に伝え、経験を共有していかなければならない。

「お布施の料金体系化と

葬儀のありかた」

地域社会が変化し葬儀の経験が共有されなくなり、寺院と関係を持たない人々が増えたとしても、お布施の料金体系化によって葬儀を導入することには問題が多い。仏教では人間は様々な縁の中で存在していることを説いている。生老病死というプロセスのなか、人と人との絆の中で生きている。しかし私たちは煩わしさを排し、快適で便利な生活を追い求めてきた。その結果として「孤独死」に代表されるような人と人との縁が機能していない「無縁社会」といわれる社会状況をつくりあげてきた。

人生の最後の死までもが、スーパーやコンビニでモノを買うように料金により選択されていくことは、個人主義化した社会を助長するばかりでなく、被災地で見られたような絆や思いを大事にする仏教本来の「お弔い」とは異なるものである。また市場経済のなかでは価格比較による低価格競争が起こり、寺院はサービス業として大資本に吸収されていく可能性も捨てきれない。地域の慣習、経済的状況や寺院との関係性の中でお布施の目安が決められていくものであり、同じ葬儀をしてもお布施の額が異なるものがお布施である。

仏教が「お弔い」とおして生きる意味を伝えるならば、目安がわからない人々に対しては料金体系で導入するのではなく、一人ひとりに丁寧に対応してそれぞれの思いを受けとめ、地域や状況に見合う方法で対応すべきであろう。私たち僧侶が財施をいただくばかりでなく、人々の苦しみ悲しみに寄り添い（無畏施）、人々と共に考え法を説く（法施）という布施の本来の姿を実践し、人々と相互信頼関係が築けるかどうかにかかわらずの葬儀のありかた、仏教の将来がかかっている。

事務総局録事

八月(十六日～三十一日)

十七日▼加盟団体代表者会議会場

視察及び打合せ(あおき郡山斎苑)

▼福島県仏教会会長及び専務理事と加盟団体代表者会議開催の件で面談(郡山ビューホテルアネックス)

▼日本仏教福祉学会藤森氏来局

十八日▼損害保険ジャパン来局

▼局内会議

二十四日▼第四十二回部落解放・

人権夏期講座参加(高山野山、二十六日まで)

二十五日▼無料法律相談

▼本会后援東日本大震災犠牲者追悼百僧法要―被災地復興祈願―取材(浅草寺)

二十九日▼中国佛教協会来局(表

敬訪問のため)

▼日中友好宗教者懇話会主催「中国佛教協会訪日代表団歓迎会」出席(浅草ビューホテル)

▼福島県仏教会会長三村真城師来局
三十日▼大和証券佐藤氏来局

九月(一日～十五日)

一日▼公益財団法人東京都慰霊協会主催「関東大震災都内戦災遭難者秋季慰霊大法要」出席(東京都慰霊堂)

▼BNN事業見直し会議出席(浄土宗 勝楽寺)

二日▼総務財政審議会

▼「宗教法人と税務調査に関する調査研究」第一回研究会出席(明照会館四階第一会議室)

▼日宗連第六回幹事会出席(浄土宗 心光院)

四日▼日本仏教福祉学会第四十六回大会震災対応プロジェクト報告会に講師として出席(龍谷大学)

五日▼第六十回「同宗連」研修会参加(曹洞宗宗務庁・六日まで)

▼岩手県仏教会及び仙台仏教会へ地域仏教会確認依頼及び本会支援活動現況報告
六日▼華嚴宗北河原公敬管長へご挨拶並びに取材(華嚴宗宗務所)

務所)

▼浄土真宗本願寺派「東北教区東日本大震災現地追悼法要」参列(仙台国際センター)

七日▼全日本葬祭業協同組合連合会事務局長松本氏来局

▼局内会議

八日▼本会推薦劇団希望舞台「釈迦内枢唄」公演鑑賞(深谷市民文化会館大ホール)

▼無料法律相談室

九日▼(株)おぼうさんどっとこむに対してホームページ上の布施料金体系一覧の削除要請文を発送

十二日▼「第四十二回全日本仏教徒会議高野山大会」打合せ(スイスホテル南海大阪)

十三日▼第二十回ヒューマンライツセミナー出席(日本教育会館一ツ橋ホール)

▼BNN第一回事業見直しコンサルティング出席(庭野平和財団)

▼念法真教取材

十五日▼国際仏教興隆協会理事会・監事会出席

表紙写真紹介

「山形県吹浦海岸の十六羅漢岩」
山形県の西側、吹浦駅から歩いて十五分ほどで、日本海の波が高く舞う岩場に出ます。パッとみてもただの岩にしか見えないその景色。よく目をこらしてみると、あちこちに人の顔が彫られていることがわかります。「十六羅漢岩」と名付けられたその通り、彫られているのは、十六羅漢さま。

この羅漢さまたちを作ろうと発願したのは、ひとりのお坊さまです。海難で亡くなられた人々を供養するため、この海辺に十六羅漢さまを生み出すことを思い立ちました。石工さんに頼むお金はすべて酒田市で托鉢をして、五年の歳月ののちでできあがったそうです。

風雨により顔が削られていってしまっている方もいますが、ここにいる羅漢さまたちはまるで海から浮き出たような堂々とした力強さがあります。

発願された当時のご住職は、完成されたのち、自ら海に飛び込んで他界したというお話も残っています。まさに「命をかけて」生まれた、羅漢さまたちなのです。

仏像ガール®

全日本仏教会後援

東日本大震災犠牲者追悼百僧法要—被災地復興祈願—厳修



8月25日（木）、浅草寺にて東日本大震災犠牲者追悼百僧法要が営まれた。当日は僧侶約150人と犠牲者の遺族ら約300人が、雷門から本堂へ練り歩き、本堂内において法要が厳修された。当日は「東日本大震災物故者諸霊位」と書かれた大きな位牌を置いた焼香台も設けられ、約三時間で三千人が手を合わせた。また、京都珠数製造卸協同組合から提供された腕輪念珠約3,000連を配付した。

8月末に各地で開催されている地藏盆に合わせて、浅草仏教会が主催し、東京都仏教連合会・下谷仏教会・全日本仏教会後援のもとで行われた法要は「東日本大震災で亡くなられた多くの犠牲者の追悼及び被災地の日も早い復興を願って（中略）人びとの心の安らぎと生きる力を与えたい（主旨文より引用）」という願いのもと、多くの方が参拝した。

全日本仏教会推薦映画

手塚治虫のブッダ—赤い砂漠よ！美しく—DVD発売のお知らせ

■全日本仏教会推薦 ■文化芸術振興費補助金助成

巨匠・手塚治虫が10年を費やして完成させた最高傑作
待望の映画化！

12月9日、DVD発売決定！

【初回封入特典】手塚治虫原画「ブッダ」ポストカード3枚組

【映像特典】 ●キャストインタビュー（予定）
●監督インタビュー（予定） ●特報（予定）
●予告（予定） ●TVスポット（予定）

【キャスト】

ナレーション・チャプラの母：吉永小百合
チャプラ：堺 雅人
スッドーナ王：観世 清和
シッタールタ：吉岡 秀隆

【スタッフ】

原作：手塚 治虫
監督：森下 孝三
脚本：吉田 玲子

DSTD03441 / 4,700円（税込4,935円） / COLOR / 本編111分 / 片面2層 /
1.主音声：ドルビー5.1ch / 日本語字幕 / 16:9 LB

(C)2011「手塚治虫のブッダ」製作委員会

【販売元】東映株式会社 【発売元】東映ビデオ株式会社

※Blu-rayも同時発売！価格等は東映ビデオホームページまで
<http://www.toei-video.co.jp>

